

ウイルス研究所

I	研究の水準	研究 26-2
II	質の向上度	研究 26-4

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）の国際学術雑誌への成果の発表は、トップジャーナルへの掲載も含めて平均100件程度となっている。
- 第2期中期目標期間の競争的研究資金の獲得金額は、6億円から9億5,000万円程度となっている。

観点1-2「共同利用・共同研究の実施状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 日本学術振興会研究拠点形成事業「ウイルス感染症・生命科学先端融合的共同研究拠点」（平成22年度から平成27年度）に認定され、霊長類及びマウスのP3感染実験、ウイルス・生命科学研究の共同研究を公募し、毎年度20件から30件を受け入れている。
- 霊長類P3実験施設は、毎年約74名の共同研究者が利用しており、共同利用研究には30頭分を提供し、エイズウイルスサルモデルの感染実験等を目的として支援体制・施設の充実に取り組んでいる。また、マウスP3実験施設は、毎年64名程度の共同研究者が利用している。

以上の状況等及びウイルス研究所の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 学術面では、特にウイルス学、発生生物学の細目において卓越した研究成果がある。
- 卓越した研究業績として、ウイルス学の「ヒトT細胞白血病ウイルス1型（HTLV-1）病原性発現機構の研究」、発生生物学の「マウス神経幹細胞の多分化能と運命を決定する因子の振動的制御」がある。「ヒトT細胞白血病ウイルス1型（HTLV-1）病原性発現機構の研究」は、国内外の学会において20件の招

待講演に結び付いたほか、平成 23 年に BMC Retrovirology prize、平成 25 年に Basic Science Award を受賞している。

- 特徴的な研究業績として、免疫学の「ウイルス RNA センサー、RIG-I-Like Receptor (RLR) の変異による自己免疫発症」、「自然免疫による炎症制御機構の研究」、ウイルス学の「エイズウイルス複製の定量的把握」、機能生物化学の「大腸菌の表層タンパク質ダイナミクスの研究」、分子生物学の「RNA の長さが測られる分子機構の研究」がある。
- 社会、経済、文化面では、特に発生生物学の細目において特徴的な研究成果がある。
- 特徴的な研究業績として、発生生物学の「マウス神経幹細胞の多分化能と運命を決定する因子の振動的制御」があり、マスメディアで広く報道され、異分野の研究者や一般を対象とした講演会に招かれている。

以上の状況等及びウイルス研究所の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、ウイルス研究所の専任教員数は 46 名、提出された研究業績数は 8 件となっている。

学術面では、提出された研究業績 8 件（延べ 16 件）について判定した結果、「SS」は 6 割、「S」は 4 割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績 3 件（延べ 6 件）について判定した結果、「S」は 5 割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1 件の研究業績に対して 2 名の評価者が判定した結果の件数の総和）

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 日本学術振興会研究拠点形成事業「ウイルス感染症・生命科学先端融合的共同研究拠点」に認定され、感染実験施設の改善・充実に図り、これら施設を利用した先端的な研究を推進している。
- 日本学術振興会研究拠点形成事業「ウイルス感染と宿主応答の総合的理解に向けた国際研究拠点事業」（平成26年度から平成30年度）に採択されている。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- インパクトファクター10程度以上の雑誌への論文発表数は、第1期中期目標期間（平成16年度から平成21年度）の年度平均11件から第2期中期目標期間の年度平均16件、トップジャーナルへの発表数は、第1期中期目標期間の計5件から第2期中期目標期間の計11件となっている。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。